

「気になる」を
どう見つける？
どうつなげる？



体験から学ぶ

行事、部活動、探究、そして日々の授業。

高校は体験に満ちています。

生徒一人ひとりが、日常的な体験を通して

新たな発見をしたり、主体的に学びに向かえるようにと、

さまざまな教育活動のなかで

工夫をこらしている先生も多いと思います。

「体験から学ぶ」とはどういうことなのか、

どうしたらより学びを深められるのでしょうか。



Report

ただ歩いて、写真を撮って、絵に描くだけなのに
今まで素通りしていた「知の種」が見えてくる

「いつもの学校」で 感性の扉は開く

気づきの感度を上げ、知の種を集める

「Feel度Walk」ワークショップ

今夏、小誌編集部は体験から学ぶための
ヒントを求め、「探究する力」の著者である市
川 力さんに「Feel度Walk」を実施して
もらいました。参加したのは埼玉県立小川
高校の生徒たち11名と先生方です。「Feel
度Walk」とは、あてもなく歩き、なんと
なく気になるものを記録してスケッチするこ
と。偶発的な出会いを通じて、感じ取る力
(感度)を上げる狙いがあります。不安そう
な生徒たちを前に、市川さんは「今日は学校
の周りを歩くよ。毎日見ている景色に、特
別なものなんてないと思う？ 子どものころ
なら、気になるものを見つけて、あちこち立
ち止まっていたんじゃないかな。今日は子ど
ものように歩いてみよう」と話し始めました。



ワークショップ企画・実施
市川 力さん

一般社団法人みつかる+わかる
代表理事。慶應義塾大学SFC研
究所上席所員。元東京コミュニ
ティスクール校長。大人と子どもが
一緒になって探究する学びを研
究・実践。多様な人が好奇心を発
揮して共に成長する場をつくるゼ
ネレーターとして活躍。

STEP /

1

校舎の周りを歩き、
「なんとなく」気になるものを
写真に撮る

「映え・ググる」は禁止
自分の感度に素直になつて

「これから40分間、少人数のグループにわかれて歩きます」。市川さんがそう話すと、生徒たちは少し面倒そうな表情をした。遠出をすと思つた生徒から「長い距離を歩くのは疲れそう…」と声があがるが、今回歩くのは高校の敷地内だけだ。3〜4人で1組をつくり、あてもなく歩く。「歩くという漢字は『少』し『止』まると書きます。少し止まってみることで、観察の感度が上がるんです。なんとなく気になるものを見つけたら、とりあえず写真を撮つてね。SNSで、映えない写真を撮ろう(市川さん)。行つのはそれだけだという。「大事なものは、みんなの中にある『なんとなくセンサー』が働く瞬間。あれ？ おや？ と感じるもの(市川さん)。スマホで情報を検索するのも禁止。目的地はなく、進む方向もグループごとに自由だ。生徒たちはキョトンとした表情だったが、市川さんに促されて歩き始める。

なかなか足が動かず
スタート地点の周りをウロウロ

とりあえず、
目の前にあるものを
撮ってみるか。



市川さんからの
質問攻めに
困惑する生徒たち。

あれ何だろう？
知ってる？



ぽつーん

「これ、すごいな！」と
自分の発見に夢中な
市川さん。

何が
すごいん
だろう。



ふらり、ふらりと
それぞれ気になる方向に
歩いていく。

よしよし、
もう声はかけず見守ろう。



さあ、歩こう！

戸惑う生徒たち。
自分が気になるものレが、わからない。



何を撮ればいいの？
なんとなくと言われても
わからない……。

同じものを撮って
お互い見せ合ったり
何を撮ったかシェアしたり
し始めた。

え？ そんなの
どこにあった？



カメラを
ズームしながら
気になる部分を
パンチャリ。

普段
注目していない
ところに
目が行く。



雨だれの梁みが気になる？

次第に、漂うように自ら歩き始める。
「とりあえず」写真を撮る。

葉っぱを実際に触った生徒の
触った感触も絵で表現する。



複雑な葉脈を描き込むの
「どんな構造になっている？」



「すごいね！こんな細かいところ
気づいたんだ！」
見回る先生も驚き、声をかける。

葉の尖り方、建造物の濃淡
絵を描くことで発見する

歩くのを終えて戻ってきた生徒たちに、市川さんは「今、撮ってきた写真から1枚、気になるものを選んでスケッチしてみよう」と声をかける。グループで模造紙を使い、それぞれ座る方向から描きこんでいく。なかなか写真を1枚に絞れない生徒には「所詮

STEP /
2

撮った写真のなかから
1枚選んで、
見たままスケッチする

なんとなく撮ったものだから。なんとなく選ぶ練習だと思つて」と市川さんが助言。生徒たちはペンを持つと、黙々と描き始めた。歩く間は不安そうな様子だった生徒も、絵を描き始めると表情が変わる。時にはスマホの中の写真を指で拡大しながら、改めて自分が撮ったものを観察している生徒もいた。色の濃淡を表そうとする生徒や、植物の葉の感触、葉脈の構造を表現しようとする生徒。集中して、細かな部分の表現を試行錯誤している。早々に描き終えた先生方は、生徒たちを見回りながら「こんなの、どこにあったの？」「私もりも上手」などと声をかける。スケッチという行為を通じて、描く対象を深く観察し、発見したことを絵で表現しようとする生徒たちに、先生方は驚いた様子。先生に褒められた生徒たちは、誇らしそうな表情を浮かべた。そして終了時間までペンを置くことなく、熱心にスケッチを続けていた。

STEP /
3

何を描いたのか、
どこが気になったのか、
発表する



小さな気づきから
探究が始まるよ



「こんなに話せたんだ」
先生たちが驚いた理由

「これは何？ どこにあった？ 見つけた瞬間や、描いている間に気づいたことをみんなにも教えて！」(市川さん)。模造紙を広げて、1人1分程度で発表をする。「校舎の脇に、ひどく錆びているロッカーがあった」と、ある生徒が発表する。「錆びの様子がよく描けているなあ！ スケッチを描いていて発見したことはある？」(市川さん)。「うんと、最近置かれたロッカーにはこんな錆びはなかったもので、年月が経つことで、このようにまだら模様で錆びていくのが面白いと思った」(生徒)。それぞれの発見を話す生徒たちに、先生方は驚きの表情。聞くと、日頃は「あなたは何に興味がある？」と聞いてもなかなか自分のことを語らない生徒が、このときは堂々と語っていたという。

「最初は戸惑っていたのに、こんなにすごいスケッチが描けた。なんとなくではなく『しっかりと観察して、ちゃんと発見してください』と言われたら、この絵が描けていたかな。無駄で無用、自分とは無関係に感じるモノやコト。そんな『雑』をたくさん集めて記録する。その積み重ねで、勝手に気づく、よつになつていくんだよ。このあと外に出たら、今まで目に入らなかつたものが見えてくるはず」(市川さん)。探究の旅路はわらしべ長者のようなもの。今掴んだのは最初の「わら」。ここからどんどん興味を広げていくことを恐れないで、と生徒たちに語りかけた。



石の中に描かれた絵の
「これは何？ 何のための絵？」



側溝に落ちている
アイスのパッケージの



ロッカーの錆びの
まだらの模様を



細部にこだわり、絵を描く生徒たち。

自分が見たものを、
見たまま表現する。

駐輪場の木の
「この木だけなんだか洋風？」



木の幹にびっしりと生えた苔の
木の上の別の生物、のふしぎを

「誰のもの？ なぜここに？」
棚に置かれたメダルの



お子さんとの散歩でも、一緒に立ち止まる機会が増えたという先生からの声も。「この視点が大事なのかと勉強になる」

ワークショップ後も、気になるものを撮り続けている生徒。「水面に映る建物の歪みが気になって、思わず撮った」

ただ歩いて、写真を撮って、
絵に描くだけで、
なぜ生徒たちは
「気づいた」のだろうか？

「Free度Walk」の体験は、参加者に何か変化をもたらしたのだろうか。3週間が経ち、話を聞くと「日常のなかで、いつもなら素通りしていたところに自然と目が行くようになった」「通学路の景色が変わって見える」といった声が生徒たちからあがった。「1年以上学校に通っているけれど、新しい発見があり、違う道を歩いているみたい」など、登下校中に気づくことが増えたという意見が多数集まった。いつもの道で「水面に映る建物の歪みが気になる」などと些細なことに気づいて、写真を撮った生徒もいる。ワークショップ当日、みんなで発見を共有した時間を振

り返り「どれも私が見たことのないものばかりだった。あのときみんなが違うものを描いたことで、いつもの学校が違うように見えた」と語った生徒もおり、他の生徒の発見が刺激となって、その後の見方が変わった生徒もいたようだ。また、参加した先生からは、お子さんとの散歩の時間が増えたとの声。「今までは急かしていた散歩も、立ち止まって子どもたちが見るものを一緒に眺めるようになりました。この視点を大事にして、生徒との関わり方や授業のつくり方を考えていきたい」。生徒だけでなく先生方にも、日々の歩き方や見方に変化をもたらしたようだ。

見慣れたはずの通学路が
「まだ知らない、新しい道」に

ワークショップから3週間後 参加者の声